

2016年5月度（第341回）ライフサイエンス分科会

開催日時：2016年5月19日（木） 14：00～17：00

開催場所：文京区民センター3階 3-C会議室

参加人数：9名

記入者：佐藤正恵（司書・ヘルスサイエンス情報専門員上級）

内容：

1. 病院図書室と エンベディッド・ライブラリアン —地域包括ケア時代の学術支援—

日本は世界に類を見ない高齢化社会を迎えようとしており、厚生労働省は日本の医療機関に対し、ベビーブーマー世代が後期高齢者を迎える「2025年問題」に向けたロードマップで、各機関の役割明確化と在宅医療を推進している。

病院内の図書室は、医療法第22条により地域医療支援病院に設置が定められた共同利用施設であり、院内および地域の医療従事者に学術支援を行う役割がある。

また病院内に患者のための図書室を設置する動きが増加しているが、これは「がん対策基本法」により、がん診療連携拠点病院や自治体には患者への医療情報提供が義務付けられたことや、「健康増進法」制定、患者サービスの一環等の理由による。

主に米国では、図書館員の役割として、利用者に積極的に溶け込んで情報サービスを行う「エンベディッド・ライブラリアン」が注目されている。エンベディッドとは「溶け込む」という意味で、医学系は特に電子化が進んでいることから、モノの管理から人へのサービスへと注力することが可能となったことも背景にある。事例としてこども病院における地域の学校との連携、自治体の保健センターと公共図書館のコラボレーションによる新生児家庭への絵本プレゼント「ブックスタート運動」、がん拠点病院の地域への医療情報アプローチなどを紹介した。病院図書室には、医療における1990年代からの根拠に基づく医療（EBM：Evidence based Medicine）推進の流れを受け、医療従事者や患者への科学的根拠のある情報提供が求められてきたが、一般市民にとっても、健康情報リテラシーの向上は喫緊の課題である。一例として、2015年4月からの「機能性食品表示」を取り上げ、インフォームド・チョイスについて話題を提供した。厚労省の情報発信等推進事業である「統合医療情報発信サイト」には、一般市民向けにエビデンスがわかりやすく説明されている。

<http://www.ejim.ncgg.go.jp/public/hint2/index.html>

2. メディアドクター指標による医療記事評価

海外での医療記事を検討するメディアドクターや、日本での活動を紹介し、免疫チェックポイント阻害剤に関する2種類の新聞記事を読んで評価するワークショップを行い、ディスカッションを行った。

海外の指標を基に、日本でも評価項目の検討が進められている。

【メディアドクター指標】出典：<http://www.mediadoctor.jp/>

・利用可能性（Availability/Access）

- ・新規性 (Novelty)
- ・代替性 (Alternative)
- ・あおり・病気づくり (Disease mongering)
- ・科学的根拠 (Quality of Evidence)
- ・効果の定量化 (Benefits)
- ・弊害 (Harm)
- ・コスト (Cost mentioned)
- ・情報源 (News source)
- ・ヘッドラインの適切性 (Headline)
- ・背景説明 (Background)

【参考文献】

- 渡邊 清高. 医療・健康報道を「評価する」メディアドクターとは. 情報管理 2014. 57, 344-347
- 北澤 京子. マスメディアと医療者のリスクコミュニケーション. 月刊薬事 2011. 3
- 渡邊 清高. 医療報道の「質」を評価する新しい動き メディアドクター. JAMIC JOURNAL 2011. 2; 20-23
- 北澤 京子. メディア・ドクター指標を用いた日英医学記事の評価. 薬剤疫学 2008; 13: 71-78
- 以上